

誰も僕を証明できないぐらいに、  
彼らと一緒に夜に溶けて、  
温く汚く、混ざり合いたかった。

街灯が僕の肩を擱んだけど、  
彼の手の感触とは違う、

錆びた鉄のような冷たい手だった。

彼の吐息が僕を溶かして、

僕と夜の境界は曖昧になった。

彼に抱かれて、僕は夜と一つになった。